



CANOA だより

61

2018年1月発行

文・写真 鈴木真由美 編集 星久美子・真野由紀 発行 光の子どもの会
Praia do Estevão s/n, Canoa Quebrada, Aracati-CE-Brasil CEP:62800-000
連絡先: info@criancasdeluz.org

FELIZ ANO NOVO!!!

2018年。ブラジルは開催国ではないのですが、W杯があるということで、年間計画の話し合いの際に教職員から「今年はW杯があるから、ブラジルの試合の日程と時間を調べて、それによっては私達の仕事時間も調整しなければいけないことを忘れないでね」と、言われました。さすがはサッカー大国ブラジル。恐るべしです。

2017年より、私たちは今後の私たちの活動の在り方というのを模索しながら活動しています。その大きな要因は、共に活動を始めた“エヴァさん”がカナオを去って以来実質、現地の活動を取り仕切ってきた“フラビアーニさん”が、2018年末をもって新たな道を歩んでいくことが決まったからです。彼女のような人材を探すことは無理でも、どのようにしたら引き続き私たちの活動が今までと同じ目標を持ち、教育の質を保ちつつ活動していけるのか。考えていてもそれに伴う人材が見つからず、途方に暮れる日々でした。

2017年前半には、このまま共に働いていく人が見つからないのではないかという焦りを強く感じるようになりました。しかし後半に入り、あるイベントで話したことがきっかけで、現在16歳で高校2年生の“ブルーナ”が実習生として参加するようになりました。彼女は私たちの保育園、学童教室の卒園生。新しい風が入ってきたことで、私たち自身も今後の道に光が射ってきていることを感じ、その後、残念ながら閉鎖となっていた学童教室の再開に向けての準備も進めていくこととなりました。「時」というのは不思議なもので、焦っていてもその“時”でなければ、物事は始まらない。それを再認識した瞬間でした。

2018年からは、ジレーニ(あだ名：ウロ)とブルーナを新たに迎え、活動が開始されます。どうか皆様、引き続き温かく見守り、応援していただけますよう、お願いいたします！



世界へ羽ばたく！ 「光の子どもたちの会」卒業生

今回は「光の子どもたちの会」の保育園クラスで働き始めたばかりの
現役高校生の実習生、ブルーナを紹介します。

翻訳：鈴木真由美



Bruna Angelo da Silva
(ブルーナ・アンジェロ・
ダ・シウバ)

私はブルーナといいます。現在16歳です。セアラ州にある小さな海沿いの村、カノア・ケブラダ(エステーヴァン村)に住んでいます。

なぜ私がカノア保育園で実習を始めたかということ、その仕事に興味があったからです。私は3歳から14歳まで“光の子どもたちの会”が運営する保育園と学童教室に通っていました。そして今、高校生となり、子ども達から学びたいと感じるようになりました。実習生となってからまだ日は浅いのですが、子ども達とはうまく関われているし、自分自身忍耐強いとも感じています。ただ、まだ勉強しなければならないことがたくさんあります。

この仕事の一番好きなところは、自分自身が幼かった頃を思い出せることです。あの頃に戻りたいと何度思ったことか。でも残念なことにタイムマシンはまだ存在しません(笑)。

カノア保育園での実習中に気づいたことは、子ども達はダイナミックに動き、創造性が高く、賢く、観察力に優れているということです。そんな子ども達の姿に私は尊敬の気持ちすらあります。何事にも興味津々で私にとって貴重な体験となっています。

私が保育園に通っていた時を思い出すと、教師という仕事は簡単ではありません。忍耐強く、創造性を高く持ち、子ども達に分かりやすいように全てのことを説明できなくてはなりません。

最後に、私は将来いったい何になりたいのか？たくさんの夢があります。教師になるということも考えたことがあります。海軍にはいることも、生物学者になることも、獣医になることも…。どの道に進むべきか、まだはっきりとは分かりません。今は教師になるという道を進んでみようと思っています。もっとずっと先、たくさんの私の夢のどれかが実現できることを願って。

感謝の気持ちを込めて。

今、アフリカにいます！ * Estou em Africa AGORA!

次なるステップはアフリカ！

2009年の6ヶ月間、サンパウロのファベラ(貧困街)の保育園でボランティアを経験した藤本夏実さん。カノアにも何度も訪れています。そんな彼女は、今年1月からJICA青年海外協力隊員として念願のアフリカで活動を始めます。今に至る思いを伺いました。

ボンジュール サバ? (Bonjour, ça va?)

ジュ マペル ナツミフジモト (Je m'appelle natsumi fujimoto.)

—こんにちは。元気ですか？

—私の名前は藤本夏実です。

1月の中旬から西アフリカにあるセネガル共和国でしばらく暮らすことになりました。ブラジルでは『ボンジーア トウドウベン?』と挨拶しますが、セネガルでは『ボンジュール サバ? (鯖? 笑)』と言います。そう、フランス語です!まさか私がフランス語を話す環境に行くなんて・・・今でも信じられません。

ずっと行きたかったアフリカ大陸へ私は保育士として足を踏み入れる訳ですが、やはりこれもブラジル無しには語れません。

まず、大学生の途中まで全く興味のなかった保育士になろうと決めたのが、ブラジルと関係していることです。学生時代にブラジルで保育園を手伝うなど子どもと関わることが多く、一人の子どもが育っていく中で小さい時の環境がその人の人生

に更に膨らみを持たせてくれる、そう感じ、その大事な時期に関われる保育士になりたいと決意しました。それからは光の子どもたちの会の真由美さんにお願ひし、カノアでは保育園や学童のクラスに参加させてもらい、ブラジルの南方サンタ・カタリーナにある保育園も紹介してもらい、体験させてもらいました。日本に帰ってきてからは、保育士の免許を取り保育園で働きました。

次に、アフリカに行きたいという思いを持ち続けられたことです。どこの国というのではなく、漠然にアフリカ大陸を知りたいと思っていたのです。なぜ思い続けられたのか、それは、今まで知らなかった世界を知るドキドキ、その時に溢れてくるワクワクをブラジルに教えてもらったからだと思います。

それほど私にとってブラジルとの出会いは私の中にある人生のベクトルを方向転換させました。

そして、今セネガルへ旅立ちます。土臭さ、生命力、力強さ、情熱。私の思う人間の原点がアフリカにはあると思います。私たち、生き物にとって大事な源がアフリカには残っていると思うのです。それを今回、感じられることができたなら最高です!!!

ジュ ヴェ オ セネガル (Je vais ao Sénégal.)

ア ビアント (A bientôt.)

—私はセネガルへ行きます。

—ではまた。



藤本夏実
保育士。「光の子どもたちの会」スタッフ

JICA職員による現地視察

2016年5月より実施しているJICA草の根技術協力支援事業。今回は中学校の先生に対する「ライフスキルトレーニング」と、前回の事業で創設したコミュニティーネットワークのメンバーへのトレーニングを実施後、そのメンバーによるアラカチ市内の他地域でのコミュニティーネットワークの創設という2つの活動を実施しています。2017年より新市長が就任し、行政の体制が大きく変わる中、それでも今までの私たちの活動を支援し、協力してきた人たちが中心となり、大きな混乱もなく、事業を継続していくことができました。そんな中、JICA横浜及びサンパウロ出張所の職員による現地視察が行われたのです。

中学校では、トレーニングを受けた先生の授業参観をすることができ、子ども達が率直に意見し、それに応える先生たちの姿を目の当たりにすることができました。ある生徒は、「思春期真っ只中の私たちにはたくさんの悩みがあるけれど、だれにも相談できないことをこうして皆の意見を聞きながら、一緒に考えていける授業があるということは本当にうれしい。これからもこうした授業を続けてほしい」と、話してくれました。また、コミュニティーネットワークでは、日本でいう近所のお節介おばちゃんから心から自分の住んでいる地域を思い、そのためにできることを協力しながら実施している姿に、いつも見ている私でさえも感激してしまいました。

2018年10月まで実施される今回の事業。最後までこうした人々に寄り添い、私たちの大きな目標である「地域が子ども達にとって健全で安全であること」に少しでも近づけていけたらと考えています。

余談ですが、新市長となり、約半年以上アポイントが取れずに苦しんでいた私。事業説明をしたいだけなのにその数分をももらえない…。しかし、JICAの現地視察があるのでぜひ市長に会いたいという、すんなりOKとなり、無事に新市長と顔を合わせ、事業説明することができました。この半年はいったい何だったのか…。まあ、会えたということで結果オーライということですね。(笑)



子育て日記より

長女は中学生となり、思春期真っ只中。それでも我が家では放っておけばずーっと話しているほど自分のこと、学校のことを聞かされるので、とにかく今は「聞いてあげる」ことを大切にしようとして心掛けています。実は今、アラカチ市内の中学校では、生徒によるリストカットが大きな問題となっています。学校のトイレなどで、ある時は一人で、ある時は集団で行われていることもあり、カウンセラーも交えた対応が求められています。ある日娘から、学校の友達が不登校になったという話を聞きました。その友達は電話やSNSを使い娘とやり取りしているらしく、なぜ学校に行きたくないのか、今の悩みなどを打ち明けているようでした。1ヶ月近くが過ぎ、娘からその友達が学校に戻ってきたと聞きました。久しぶりの登校。その友達を門の前で待ち、「おかえり」とハグをしたという娘。娘曰く、自分は何もしていない。ただ彼女の話聞いていただけなのに、自分から「もう大丈夫。明日学校に行くね。」と言われたそう。この時期になると、小さなことでもそれが火種となり、リストカットや自殺などにつながってしまうことがあります。私自身、ブラジルでこうした問題に取り組んでいるだけに、娘がもうそんな年齢に達したのかと、実感させられた出来事でした。

伝統を守るのは難しい ジャンガーダレース “漁師のための、漁師による、漁師のお祭り”

毎年9月7日のブラジル独立記念日に合わせて開催されていた「Regata das Jangadas do Estevao」(ジャンガーダ(帆船)レース)。20年近くも続けてきたレースなのですが、残念ながら2017年は開催されることはありませんでした。



近年、セアラ州の各海岸で実施されているジャンガーダレース。なんと、アラカチ市内でも20ヶ所以上で実施されています。それでも、各海岸ごとに運営者の思いやテーマが異なり、その違いを体験することも楽しいものなのです。

エステーヴァン村のジャンガーダレースの運営委員の平均年齢は62歳。最高齢は67歳です。たった4名の運営委員ということを見ると、運営側に受け継ぐような若者がいないということが見て取れると思います。2017年は4名の内2名が大きな手術を受け、1名は体調不良。残念ながら今回の開催は見送るとというのが彼らの結論でした。

ジャンガーダというのは漁師の船、帆船のことです。モーターを使わず風だけで移動するので、誰でも簡単にできる…というものではありません。だからこそ、こうしたレースを通じて、ジャンガーダに触れ、その漁船を使う人たちが村の中にいつまでも残るようにと、高齢の漁師たちは考えたのです。

伝統文化。それは放っておけば継承していくというものではありません。漁船であるジャンガーダについても、それは同じことでしょう。レースを楽しむだけでなく、ジャンガーダという漁船に触れ、それを操る技術を身に付け、いつまでも村に残しておきたい。そんな胸の奥の思いを、若者が感じ取り、これからも海岸にジャンガーダのある、そんな景色を見続けたいものです。



国内活動＊Atividade no Japão

●10月7日(土)・8日(日)・9日(月)

よこはま国際フェスタ@グランモール公園

三連休、今年もよこはま国際フェスタに参加しました。今年も去年と同様、グランモール公園が会場でした。去年までは3日間全日程参加でしたが、参加団体が増えたために、会としては今年は2日間の開催になりました。

当日スタッフとして、カノア元ボランティアの小林美香さん、高橋沙織さん、星久美子さん、事務局長の堀池さんの他、東海大学「ベイジョ・メ・リーガ」の上野大樹くん、鈴木真由美さんの弟さん、**和田さん**にもお手伝いに来てもらいました。

会のブース出展場所が、今年は人通りが少ない場所だったので、例年のようにグッズの売れ行きはそれほど伸びませんでした。エステーヴァン村のお母さんたちの手作りの「ラビリント」や、去年も大変好評だったエステーヴァン村オリジナルの「ゆるキャラキーホルダー」、カノア・ケブラーダの絶景やエステーヴァン村の子どもたちを映したポストカードなどを手に取って見て頂きました。

また、フェスタで行われているキーワードラリーやSDGs（持続可能な開発目標）ラリーにも参加していたので、スタンプラリーでブースに寄った方々にも会の活動について知ってもらおうきっかけとなりました。



新発売の
ラビリント・ヘアバンド♡



ありがとうございます＊Obrigado

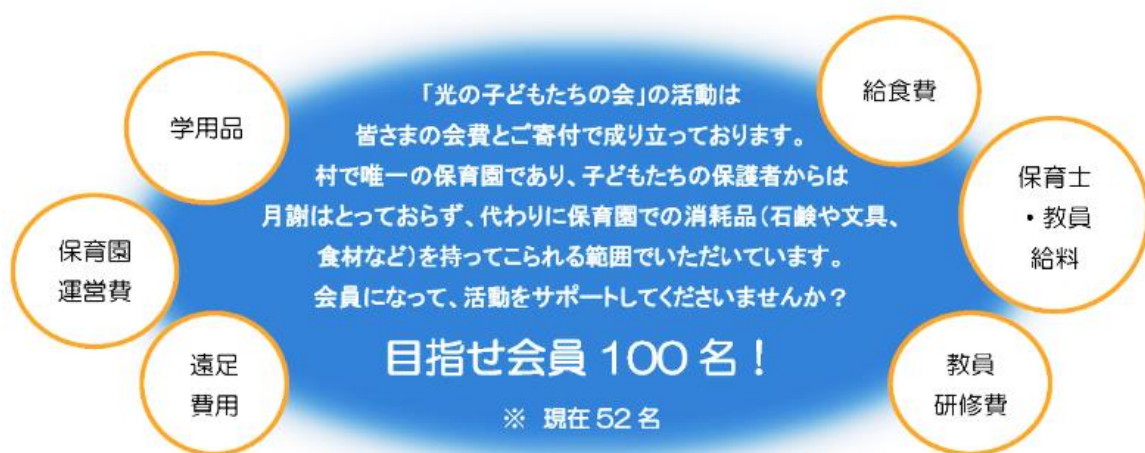
平成29年6月1日～平成29年12月19日現在までに会費及び寄付を頂きました皆さま及び物資支援を頂きました皆さまのお名前を下記に記載いたしました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。これからも一人でも多くの方に会員になって頂き、カノアの活動を共に支えていただけると嬉しいです。目標会員100名！！

会費及び寄付を頂きました皆様（順不同）

安藤一樹さま、大場富美香さま、影山由香里さま、金本りせ子さま、坂井春菜さま、関塚翼さま、長谷川伸さま、藤本夏実さま、三浦佐千夫さま、吉川真弓さま、和井田なみさま

物資支援をいただきました皆様（順不同）

三浦佐千夫さま、和井田なみさま



年会費（五千元）・ご寄付のお振込み方法は4つ

1. 自動引き落としによる振込み

自動引き落とし希望の口座のある金融機関で手続きができます。引き落とし日、金額をご指定いただけます。尚、ゆうちょ銀行の場合は以下の〈2. 郵便振替〉と同じ口座番号ですが、他金融機関からの振込の場合には〈3. ゆうちょ銀行振込〉の口座番号となりますので、ご確認ください。

2. 郵便振替

口座番号: 00280-1-41787

加入者: 光の子どもたち-カノアの活動を支える会

3. ゆうちょ銀行振込

名義: 光の子どもたちの会 店名: ○二八(ゼロニハチ)
店番号: 928 普通預金 口座番号: 5552598

4. インターネットよりクレジットカードで振り込み

光の子どもたちの会ホームページ

(http://criancasdeluz.org/inicial/index_jp.html)より、お振込みいただけます。

お問い合わせ先: 代表 鈴木真由美、日本事務局長 堀池真輔

〒221-0841 神奈川県横浜市神奈川区松本町 1-7-1 TEL/FAX 045-321-1824 info@criancasdeluz.org

フェイスブック「光の子どもたちの会」 ホームページ: <http://criancasdeluz.org>

エレナさんにインタビュー*Entrevista a Helena

毎回大好評のブラジル料理教室の開催は、エレナさんに教えて頂いてから10回を数えました。今の光の子どもたちの会の国内活動にとって彼女の存在は欠かせません。来日27年目で日本語も英語もペラペラなエレナさんの秘密に迫りました。

Q1：来日した時のことについて教えてください。

私と夫はブラジルで教師をしていました。夫が日系3世なので日本で働いてみることとなり、1991年に3ヶ月間だけというつもりで来日しました。でも、私も夫も次第に日本の生活に慣れて楽しくなり、それからあっという間に27年目になりました。最初はとても大変で、日本語が全く分からず話すことも読むこともできませんでした。しかし、いつも私たち夫婦を助けてくれる人がいたおかげで、困難を乗り越えて来られました。私たちは、「International Press」というブラジル人向けの新聞社で働き、神奈川県伊勢原市に長年住みました。2人の息子はそこで生まれました。今では日本に来れたことにとっても感謝しています。新しい言語を知ったり、いろいろなことを学んだからです。

Q2：息子さんたちのことについて教えてください。

長男のダン(旦)は25歳で、アメリカのコネチカット州立大学でマーケティング学を勉強し、去年卒業しました。ボストンで研修を終えた後、日本へ戻ってきました。次男のカイ(海)は20歳で、ワシントン州立大学で経済学を勉強中です。4人だけの家族ですが、とても絆が深いと思っています。

Q3：「光の子どもたちの会」の活動に参加してどうですか？

あなたたちの団体について長年よく知っています。鈴木真由美さんと知り合ってからもう18年ほどにもなります。私がお手伝いできることはとても嬉しいです。長男のダンも、Facebookで料理教室の宣伝をしてくれて友達を呼んでくれたこともあるんですよ。「母の料理はすごく美味しい」と書いてくれてとても嬉しかったです。

Q4：現在の仕事と趣味は何ですか？

日本の学校でブラジル人の子どもたちのサポートをして22年になります。昨年はモザンビークから来た2人の生徒のサポートをしました。そして、日本人の子どもたちに英語を教えたり、日本人の大人にポルトガル語も教えています。それから時々、日本人の友人達とケーキ教室を開催しています。ブラジル料理、イタリア料理、ポルトガル料理は長年教えてきました。本当に料理が大好きなんです。趣味は編み物と旅行です。グループで何かをするのが好きなんです。そして、私の教室に参加してくれる人たちが大好きです。

Q5：「光の子どもたちの会」の皆さんへメッセージ：

今後もカノア・ケブラーダに住む子どもたちのお手伝いが続けられるように願っています。

今後もエレナさんの料理教室にご期待ください！

みなさんの参加がカノアの支援に繋がります。友達を誘っても、子連れでもOK。多くの方のご参加をお待ちしています！

☆料理教室のお知らせは、光の子どもたちの会のfacebook、またはエレナさんのブログで随時お知らせをしています。

エレナさんのブログ↓

<http://saudade-brazil.cocolog-nifty.com/>

